



未来を夢見て

2020/9/18 No. 36

実るほど頭を垂れる稲穂かな

9月18日(金)。午前7時から大和町役場の駐車場で行われた「秋の交通安全県民総ぐるみ運動出動式」に参加しました。清々しい朝で、車の窓を開けて会場を目指しました。途中、見事な田園風景が広がり、稲穂が実っている様子が目にとまりました。深く息を吸い込むと、ほんのり稲穂の香りが鼻孔をくすぐり、生前、父がよく私に語っていた標記の言葉が脳裏をよぎります。

さて昨日、2年生の授業研究会が行われました。授業者は千葉信哉先生です。出張のため検討会には参加できず、授業のみ参観させていただきました。とても丁寧な指導で、子供たちも落ちついて授業に取り組んでいることがよくわかりました。研究や授業のことは昨日の検討会でたくさん話題になったことと思います。まだまだ若い千葉先生、今後の糧にしていただければ幸いです。

ところで、今回2年生で取り上げた『ニャーゴ 宮西達也 作・絵』、調べてみると第1版が発表されたのが、1997年、23年前です。23年前と言えば当然私も担任をしていた時代ですが、この教材を扱った記憶はありません。今回、じっくり読ませていただき、この教材の面白さに引き込まれました。以下私見です。

作品を通して、ねことたま(おじさん)の変化が絶妙です。例えば最初のニャーゴはねこ、でも最後のニャーゴは、たまおじさんのニャーゴです。

子ねずみたちの勘違いのペースにどんどん引きずられていきますが、心の中では(こいつらを食べてやる)と食べる気満々なのですから、読み進める子供たちもハラハラドキドキです。それだけに「ひひひひ。」の音読は重要です(2回でできます)。

後半、ねこ(たまおじさん)が「おれのうちには子どもがいる」あたりが1つの山場でしょうか。何もここで律儀に子どもの数を答えなくても……。それを聞いた子ねずみたちが、躊躇なく自分の分のももをあげる行動には、たまおじさんでなくても、(ううん)です。ここの「ううん」の音読も大事にしたいですね。

この子ねずみたち。冒頭先生が猫の怖さを説明しているにもかかわらず、おしゃべりをしていた子ねずみたちです。命に関わる大切な話です。どこかにそんな子ねずみみたいな子供たちはいませんか？！

「音読・朗読による国語教室」(教育出版 竹田幸正著)で、「読み手の感じ方や考え方は音読や朗読に表れる。子どもたちがどのように受け止めているかを知るためには、またそれを基に深めていくためにも声に出して読ませることは大切である。」とあります。

2年生の先生方の研究で扱っている気持ちメーターが変わったように、子供たちの音読も日々豊に変わっていくことを願います。千葉先生、2年生の先生方お疲れ様でした。



(文責：手代木)